

「覚帳」「覚書」の世界

大林浩治（教学研究所）

現実と現実感の間

今この世の中、何でこんなことが...と思われることがよくあります。そんな現実に関心はどのように結びついているのか。よく思われます。社会の移りゆきも激しい。

ある先生と話しをする機会があって、そこで話したのは、こういうことです。信心の大切さは、これまで暮らしに密着したかたちで説かれてきました。だけれども、例えば食事訓にしても、食べ物の大事さ、天地の恵みに感謝するなど、それが当たり前だった光景ではあったが、いまでは容易に出来がたいことになっています。食事は時間がバラバラになってるし、食事もカップのラーメンだったりして。食事の際の天地の恵みというより加工技術のすごさの方に思いが行くようになっています。

これまで信心と密着感があった生活の土台が急激に変わってしまっています。その中で私たちはなにをどう感じ、信心の問題として切り結んでいくのか。信心へ目を向ける文脈といった、新たな語り直しの中から発見していくような信心が求められてきていないでしょうか。

考えてみれば、時代は変わるんであって、変化する時代や社会にあって、支えてくれるようなかたちで信心が実感されるんだといえます。信心が実感される、その実感は変化する歴史の舞台の上だと。教祖様は、そんな中で神様に出逢われています。教学のモードとしていえるのは、そうした変化の仕方にたって、信仰存立(信仰がある)の「なるほど感」の要件が何なのかを示すことじゃないかと思うのですが、これがなかなか容易じゃない。

不審者情報がこんな田舎町でもほぼ毎月学校から届きます。地域社会の活性化なんていってますが、親や子どもがぴりぴりしては難しい問題です。いつどこでなにが起きるか分かりません。誰がいつ襲いかかってくるか分からない。テロにしてもそう。自然災害、環境破壊の問題も身近な問題となってきて、この世の中での実感があやふやになっていきます。人間の心のバランスの崩れにもなっています。人間の内面という自然も、大きな自然と調子を合わせています。

少し教祖様の時代にいたって、同じような問題を見てみたいと思います。病気やテロ、災害が人心に多大な影響を及ぼしていることが分かります。

文政五年、西日本はコロリ流行。広島、大坂がひどかったとされています。安政から万延の改元は、井伊大老暗殺テロによるげんなおしの意味を持っていました。

天保四年は異常低温、風水害で全国的な凶作・飢饉で、これが数年続き、各地で一揆、打ち壊しが起こります。天保八年には、大塩平八郎の乱。

インフレもひどい。米が銭「百文」につき、享保飢饉でさえ五合だったのが、天保七年の飢饉で二合五勺、慶応二年には一合五勺から一合二勺になってます。

安政二年江戸大地震、安政三年にはその江戸が大型台風に見舞われます。

安政五年には、コレラも流行します。

死者が安政地震で七千。コロリは三万以上とされます。安政六年には、広島大地震、そ

の後、コロリが流行します。

日常の秩序が転覆するような気に襲われた中に、おかげ参り（文政一三年 五百万）や慶応三年のええじゃないかも起こります。世直し気分は、とうとう維新回天の業に向かいます。

この世の中どうなっているのか。なぜこんなに心苦しいのか。実感的に世の中を思えない状況。救われがたさを強く抱かせてくる世界です。現実を現実として受けとめようにも、世の中の現実に現実感を与えることが出来なくなっています。

そんな社会と心の歪みに、ものすごいパワーを持った神が登場しました。金神です。社会秩序の形成と破壊に関わる「力」として恐れられます。

金神信仰とよくいわれます。生じたのはその信仰ですが、それだけではありません。その金神が、人間にとっての神の意味、人間の根源を説き明かす道理を聞かせ、さらに物語も聞かせてくれるのです。「覚帳」「覚書」がそれです。

本教の信仰が生まれてくる前に、社会全体が揺らぎに揺らぎ、それが心のふらつきにもなっていました。私は、この問題は肝心なところだと思うのです。人が信心に目ざめる一歩手前にあるのは、この問題だと。日々の暮らしの中で、現実と現実感に大きな隔たりを生じかねない。溝になりかねない、ふだんの生活がそのようにたたずむことになっているからこそ、取次の働きが必要になるんだなあ。

取次は、救いにみちていないと私に感じさせる世界。現実感が喪失している世界から光を生み出すような、その力に直結しているといえます。生きていけないほどに現実感を奪われたとしても、そこに光が育まれていく。そういう営みだといえます。おそらくそこには、それまで意匠登録のように見られていた教師であるとか、信者であるとか、取り次ぐ者、取り次がれる者という立場はなく、あるのは、心で捉えられている世界に立って生命の脈動が生まれくる、その時をひたすら待つ神と人の関係しかないといっよよいと思います。何しろ神様が働きはじめる手前の段階で、あらかじめ立場が用意されているわけがありません。

さて、そうした世界、現実と現実感の隔たっている世界において、「覚帳」「覚書」をどう体感できるのでしょうか。

「覚帳」「覚書」の神語り

私は常々どう考えていけばよいのかなあ、と思っていたことがありました。それは、「覚帳」「覚書」が神様の語りを記しているということです。神様が語っている。それを人が書き記している。それはどういうことを意味しているんだろうか、と不思議に思っていたんです。

何が書かれているかじゃないんです。神が語ってき、またそれが書かれる。そのことが何なのか、なのです。書かれていることと、それとは違うんです。

たとえば、それは人が会話をしているよと感じる、もどかしさの問題に似ているといっよよいかもかもしれません。「私の言いたいのは、言った内容じゃない。それによって言わんとしたことなんだよ」というような。

「われ思う故にわれあり」。これはデカルトの名文句です。「お前さんは存在している。そうかもしれないが、しかしそれはどれほど確かなのかい」。こういう問いに対する解答

だと思えば理解しやすくなるのかもしれませんが。けれども、それじゃ、この文言の奇妙さには届かない。「われあり」と真剣にいつているなんて、普通あり得ないからです。

私は、その問題を「われ思う」とまで言ってみて、「ある」「存在している」ことを確かめるほかなかった、精神状態のぎりぎりのところがどれほど切実なものだったか、と考へなければならんのではないかと思います。「私がある」という確認のできがたさがどれほど深刻なのか。デカルトの思索が生きた問題になったのは、それがあからずからです。そのレベルで問うてはじめて問いを生きる人間的な次元があらわれる。そこを大事にしたいと思ひます。

そう見ていくと、この文句が自己確立の要求なり、主体の確立といったわかりよい文脈を離れていきます。実は主体の確立なんていつてられないほどの混乱に立ちすくんでいたのだなあ、とわかってきます。つまり、私がある、あるということが、生きられて感じられていないほどに錯乱している。主体などいつてられないほどの危機を迎えているに違ひない。狂気すれすれ、分裂症状すれすれの問いです。しかしそれゆえに、この問いが放たれた意味がある。

話はさらにずれていきますが、同じ問題は、一つの視点で物事を捉えるような見方の問題に嗅ぎつけることが出来ます。遠近法です。ルネサンス時代に生まれたこの技法は、人間にとってあたりまえな知覚様式にさえなっているといえます。しかし、その技法を使っていたレオナルド・ダ・ヴィンチでさえ、それによって混乱したといひます。メモにはこう書かれています。

「このような発想は、観るものに対して一つの眼で鏡に向かうように強いるもので、そうした穴を通して見るならば確かによくは見えるだろう。しかし、こうした技法で制作された一つの作品が、同時に数多くの眼で眺められると、ただ一つの眼だけはこの遠近法の役目をよく理解できるが、その他の眼はどれも混乱したままになることだろう」(『手稿』)

逆説的ですが、一つの見方へ固定しようとしたから錯乱したといひます。分裂症状は、一つの観念への拘束に抗うように生じる。一つにまとめようと無理をするから分裂しちゃう。

C・ムフという人は「問題なのは、統一的な主体という理念そのものなのである」(『政治的なものとの再興』)といひます。自分というものは構築すべき確固たる意識で見れば見るほど、私(私が私であるような私)の問題は鬱屈し、遂に外側に出てきて、今と言う精神的な病を生じさせます。私は、輻輳する世の中で、親であったり、子であったり、男であったり、近所の子からは変なおっさんといわれもする。いろんな帰属先があり、すでにいろんな自分として見られている。そういう多様な主体をアレンジの中で生きているんだと思ひます。そういうあり方でいいんじゃない、と試してみたくになります。

この問題にかこつけて考えると、このお道で言う「一心」も、別の装いで受けとめる事ができるのかもしれない。自己という主体における一心不乱みたいなものではない。そうだとすると、意識の分裂に苛まれます。むしろ、分裂以前の状態、自分という同一性の手前での天地、宇宙への帰一のような「一心」ではないかと。心はその時、様々な事物にも届きつつ、自分でもあるような広がりとともに想感されるのであって、自分はそこで様々

に存在しているものたちの単なる一つになることができる。そういう心なり、眼差しで浮かぶような境地だろう。

神様はそういう心のありように届いた音・声です。文字のない口頭言語の原始に、草木や神々が音であり声であるような言葉を発していたのも、その想感が受けとめた世界だったと考えることができます。

草や木が喋る世界

神様の声は、この世でないあの世、異界から届く声といえます。「覚帳」「覚書」にあるのは、今述べたような、向こうの世界からこちらが見られている世界です。

神様の声をきく人は、不思議な感覚に見舞われていることをまず確認する必要があります。風呂に入って上からフタをする。その閉ざされた中に自分がいるような。感覚遮断実験が、また別の感覚世界を自分に抱かせるようなことがらです。ある人は、酔いつぶれて倒れているときに、なぜか周囲の声が距離感覚無しに一挙に降り注ぐようなことがある。それこそお知らせの世界だ、と冗談か本気なのか分からない感じでいっています。多分本気なのでしょう。酔って言ってましたから。

ホーフマンスタールといえば、1874年明治7年ウィーン生まれの詩人、作家ですが、その人がいう感覚にも近いかも知れません。

「個々の言葉がばらばらのまま漂い、これを見つめるうちに渦をなしてまわりはじめ、もうとめることもできないまま空へと突きぬけるのです」(『チャンドス卿の手紙』)。

この人は、「ひなたぼっこする犬」と一体化します。そしていいます。「この体験は言葉では追いつかない」と。無事平穏の日常とそして対極にある社会の激変の感覚の歪みにあって、とるにたらないものが、感動的に立ちあらわれるのだと。

宮沢賢治の『鹿(しし)踊りのはじまり』には、こう書かれます。

その時西のぎらぎらのちぢれた雲のあひだから、夕日は赤くななめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてみた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行われてみた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。(中略)

嘉十はにはかに耳がきいんと鳴りました。そしてがたがたふるへました。鹿どもの風にゆれる草穂のやうな気もちが、波になって伝はってきたのでした。

嘉十はほんたうに自分の耳を疑ひました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。」

これは、トランス状態にはいる瞬間です。「もうまったくじぶんと鹿とのちがひを忘れ」る嘉十。向き合う対象の方に同調してしまう。神の言葉を聞くのも、同じだといえます。安藤昌益は、おもしろいことを言っています。「狐の人に憑くに非ず、人の狐に憑くなり」(『統道真伝』)と。人は狐に憑く能力を本来兼ね備えている。

トランスなどというと、変な誤解が生まれるかも知れません。神が現れてくる世界、神

が語るような世界は、足もとのおぼつかなさ、精神的な失調に襲われた人間によくおこります。しかしそう言っちゃうと、失調感覚を異常とし排除していく考えにもいきつきやすいのですが、むしろ排除するのではなく、人間とはそういう状態になりもし、また行き来さえすることを知っておいていいのじゃないでしょうか。

それは誰しもあった経験でもある。誰しもちっちゃなとき、草や石や木ぎれと話しながら遊んだはずです。表現の世界では擬人法とも言われます。木が喋るというのは、擬人法という了解があるからでしょうか？そうではないと思います。擬人法という表現技法を生み出させる何かがあるからでしょう。先にその了解事項があるからであって逆ではない。

つまり植物などと共に神々が言葉を発していた。その世界と共通の広がりを持つ祝詞など祭祀儀礼が発達し文学も生じる。言葉は、そもそも神のもので、そういう無秩序の混沌な次元が、混沌なりに受けとめられてきた、その世界理解があるからだといえます。

ちっちゃな子は、木ぎれなどを配置しながらお話をします。その世界は自分とは別な次元であり、口を衝いて出るような一人称的な語りです。しかし、その一人称は主体とか自我とかとは別。語りの方と同一化し、語りとしてその子の口をかたちづくりします。その子の思索の内容、人格に回収されるものではありません。

折口信夫は、神々の物語は、まずは巫覡(ふげき)の口を通じて、神が語り出すもので、巫女のカタリとして発生し、語り手自身が語りの主人公と一体化する。だから主情的なものとなっている、とっています(「国文学の発生」)。ですから、子どもも、その子の感情にリズムを合わせたお話になっています。

子どもばかりの混沌ではないのですが、今では子どもにしか日常的に見られなくなったといってもよいかも知れません。子どもが語っているのは、創作とっていいのかも知れませんが、よく聞くと、お話というありかたで、木ぎれや石たちの「ことのいわれ」を語っているといえます。その子の口を通じての「もの」や「こと」たちの本質が、感情を介し、語りという方法で示される。お話の内容そのものが本質ではありません。語られている中に示現してくるのです。

神様が語る世界は、先ほどから言っているように、自分という人格に回収させるようなあり方では触れ得ません。幻聴や幻視的な感覚が取り巻くように自分が置かれています。それは同時に、自分といった意識を生きる人にとってはものすごく不安に襲われることを意味します。

しかしこうもいえます。その状態に至っているということは、手応え確かな実在感に支えられたもう一つ別の世界があることを見出させ、そこから届けられるメッセージを待ちかまえる態度をとっているのだと。単なる事物の背後に、事物ならざる意思や気配を見てとる。それがいかにもたしかだと、その人物に実感されます。

縁起

その中で、神というこの世ならぬものが、この世の人や事物に働きかけてくる。そのとき立ちあらわれた神は何を語っていたのか。個々の語りのことではなく、その語り全体がなにを象徴しているのか、です。語られんとしたのは何か。つまり「覚帳」「覚書」のミソ。

それは、一口にいえば、世界がある謎です。神様と人が出逢うことというのは、この世

界がある、そのあることの始まりに生じているからです。その出逢いがなければ、この世がこの世としてある十全な意味をなさない。人間が人間であるという意味をなさない。そういう形で、現実感が回復されていく。ものごとの始まりにある由緒書になっていると思うんです。

そう考えてみて、私は「覚帳」「覚書」が神と人が出逢う「縁起」だと思えてきました。「覚帳」が記される現実舞台に目をやるとき、金神の宮創建、神職取得、喪失などが起こってきます。土地を基盤として、神の語りを受けとめる鎮座縁起的な様相が「覚帳」の書き出しなどに想定することが出来ます。しかし現実には宮が建てられない。この事態に遭遇しプラグを抜かれます。抜かれたのは、鎮座縁起のかたちで構造化されようとしていた神の語りです。

そこで何が起きるかということ、土地を介した神の語りは、土地から離れ、神の示現の意味を別なかたちで語ることを必要とする事態です。そのことを証するのが「生神金光大神、生まれ所、なにか古いこと、前後とも書きだし」という書き出しで始まる「覚書」。そして今度は、人間世界に登場してきた謎が知らされていきます。神とは何か、人間とは何か、という根源的な問いから裏打ちされていったのが「覚書」だとみることが出来ます。

具体的に見ていきますと、「覚帳」の冒頭では、金光大神の弟繁右衛門の神の広前普請費用に対する「神のたのみはじめ」(安政四年十月十三日)が記されます。そこに開かれている見晴らしは、在地の信仰、氏神信仰に埋没してよいような宮の意図、鎮座縁起の視界です。

しかし、御存知の通り、宮建築は頓挫します。近世から近代へ、在地と結びついていた鎮座縁起解体の状況を呈していきます。「覚帳」での語りはプラグを抜かれるのも、こうしたことが理由に考えられます。あるいは元々その問題が語られる方向をもった「神の頼みはじめ」の記述かも知れませんが。

ともかく、おのずと、これまで当たり前と思われていた信心の問題がクローズアップされてきます。神が語るのは、世界がある謎だといいました。神と人とが出逢う問題で明らかにされることとなります。何しろ神と人とが出逢う問題です。これまで逢ってきた神の出逢い。おなじみの出逢いじゃない。ピカソが、ニワトリの絵を描いて、俺はニワトリを世界ではじめて発見した、というような意味での神の発見といってもよい。

「覚書」はその発見を促したこととなります。

「覚書」では、弟繁右衛門のもとへ働きかけた金神からの普請入用の頼みの前に四十二歳大患の事蹟が配置されています。先行して書かれていた「覚帳」では、普請入用の「神の頼みはじめ」でしたが、その「覚帳」のはじめに四十二歳大患の意味が被されたといえます。

四十二歳の大患で証されたのは、従来、悪神と呼ばれてきた既成枠組みから解放される金神出現です。繁右衛門の伝承を引き受けて確認をさせるのです。新しい神の出現は、あらゆる神仏にとってもこれまでの神信心の枠組みから解き放たれることを意味します。

それが知らされた途端、「ここまで書いてからおのずと悲しゅうに相成り候」と、書く本人の感情が刻みつけられます。これら記述がなにを意味するか。

それは、これまでの金神信仰を超えて「金光教」が生まれ出た、そんな「宗教」の個体発生的な視野で捉えるような刷新ではありません。むしろ反対。人と神との新たな出逢

いを可能にした刷新でした。実は、宮を頼んできた金神がほんとうに求めたのは、その刷新だったと知らされるのです。「そういうことだったのか」と深い感慨に教祖様は浸られます。

「諸縁」でがんじがらめになった神祇信仰をふりほどくことで、神々が人間の拘束、思い入れからやっと解放された。神が神として躍動するにふさわしい出逢いが可能になった、という意味でしょう。ありとあらゆる神との真の出逢いを可能にし、その世界を広げていく、その世界を実感させる信仰に名前を与えられているのが、金光教なのだ。

なるほどと見えてきます。宮建築が怪しくなる中で、宮の不在を超えた神発動の意義が「覚帳」に見えてくるからです。時に激しい感情も合わせて、神様は告げてきます。宮建築の背景にある、人間の勘違いに対して。

金光大神社の口で、神はものを言ってきたのですが、「覚書」が書かれる明治七年以降、語りを筆記する人の方に口がセットされていったような感もあります。金光大神の口を通じて、気脈を共にした神のみ思い、こころ、神意として「お知らせ」が綴られていったとも言えます。

はたして、そうした神との出逢いは、金光教という宗教にとっての新しい神の発見といった意味でしょうか。それでは金光教、天地金乃神という一つのカテゴリーの問題にとどまってしまう。むしろ、世界の神が新しく発見される事態を証すのではないか。そして神と人との関わりが一変される事態が見出されるようなことが書かれていると思えます。

まとめ

もともと縁起は、土地と切っても切り離せないものでした。土地を介して縁起を結ぶものだったといえます。しかしここでは縁起をかたちづくる実際の土地を離れて、土地と結ばれた神信仰は、そもそも何だったのかが問われるようなことになります。またそのことが、逆に土地とは何なのか、人間と神との出逢いがなんなのかを証してくる神語りへ導いたといえるでしょう。安定した人間、土地に生きるといった当たり前のことが不可能になる、近世から近代の移りゆきにあって、「どっこい神はここにいまっせ」と、その縁起を結ばしていくような世界が現れたといっている。

それは、メタ縁起といってもよい。なぜメタなのかというと、「覚帳」「覚書」の縁起世界が、もともと用意されるべき縁起の定型と構造を食い破って、縁起そのものを、土地や宮なしに説き明かしているからです。人間を救う力の作動そのものからの神発動の新たな可能性とは何かを指し示していたといえないでしょうか？

このことを、流動化する今に敷衍して考えてみるとどうでしょうか。いま金光教として促しを求められているのは、金光教信心の興隆でありましょう。そうでありますが、それは教団内部に自足させて捉えるようなものではない。教祖が、氏神で済むような宮信仰を超えるように、金光教こそが、世の一般の宗教観などを超えた世界の神々への思いを届かせていく信仰となっていかなければならない。新しい神の出現といっても、ほんとうは神を受けとめる人間の側の神観が新しくなったかが問われるべきでしょう。人間が新しくなったのかと問われることでもある。人間に問われているのは、実はそのことなのじゃないのかなあと思います。

ありがとうございました。